資料３

平和のフロンティアの「フロント」はどこにあるのか

北海道大学公共政策大学院
鈴木一人
kazutos@juris.hokudai.ac.jp

フロンティアとは何か

- 「既知」と「未知」の境界
  - 「文明」と「野蛮」の境界でもあった
- 二つの世界が交わることで新たな文化が生まれる場所
  - なぜアポロ計画が中止になったか
    - 財政問題など以上に、交わるべき「未知」がなく、新たな文化が生まれなかった
- 「平和」の「フロンティア」？
  - 平和の「既知」と「未知」との遭遇？
  - 2050年という「未知」を想定しても「交わる」ことはない
  - バックキャスティングによる「交わり」

2050年の世界を形づける要素

- 技術
  - 40年間の技術革新
    - 情報通信、医療技術、交通手段、軍事技術・・・
    - 様々な技術の変化による社会構造の変化、認識構造の変化
  - 技術革新の方向性を見出すことは困難
    - これまでのパラダイム：Big Scienceから人に近い技術へ
    - 市場経済によって推進される技術、置いていかれる技術
  - 平和・安全保障関連技術
    - 無人化技術の進展→UAV、ロボット兵士→倫理上の問題
    - 直接の殺傷兵器ではなく、社会システムを攻撃する兵器
    - 攻めるも守るも技術的優位性とその応用がカギとなる
    - 市場を通じた技術の拡散、情報の流通による技術の拡散

2050年の世界を形づける要素

- 市場と国家／社会の関係
  - グローバル化の進展による市場経済の統合
    - 高賃金国から低賃金国への雇用の流出
      - 中国も近く高賃金国にシフトする
    - 社会の二極化が進む→社会的不安定＋国家財政への負担
    - 技術開発への投資vs.社会安定のための福祉・雇用創出
    - 技術水準の平準化が起こり、高技術国と低技術国の格差
  - 平和・安全保障関連の問題
    - 戦費調達の困難さ→国家間対立を武力で解決することの限界
    - 格差社会・高齢化社会における動員のむずかしさ
    - 「戦争」「平和」という概念自体が大きく変化していく

現在の延長の日本の姿

- 過剰な技術開発による「ガラパゴス化」
  - 技術力だけは抜群だが、それが市場・軍事に応用されない
  - 部品は作れるが、システムが作れない
- 硬直した国家－市場関係による閉塞感のある社会
  - 過剰な財政赤字と社会保障費の問題
  - 二極化される労働市場と高齢化した社会
- 社会的フラストレーションと極端な議論が蔓延する
  - 妥協が難しく、調整が効かない社会
  - 感情的な反応が思わぬ国際的な摩擦や対立を引き起こす
  - 財政的制約や技術的優位性などの計算に基づかない、感情的な行動を起こす可能性

2050年にあるべき日本の姿

- 国際的な調整能力のある国家
  - 一定規模の経済力と諸外国からのRespectを得られる国家
  - 対外的な交渉能力を持ち、妥協点を見つけられる国家
    - 語学能力、他国文化への寛容性、新しい概念を創造する能力
  - 国際社会に「味方」を作る能力
    - 国際社会における「数の圧力」が使えるだけの魅力
    - 状況を読み、スピード感をもって、新しいアイディアを出す能力
  - 国内における「幸福」と「余裕」
    - これがないと、国際社会での行動の自由が制約される
  - 平和・安全保障関連
    - 理念に基づいて行動できる能力（cf.「人道的介入」）
    - 「人類益」「地球益」を主張しながら「国益」を実現できる能力
    - 既存の秩序の攪乱者に対して断固として対抗する能力

あるべき姿に向けて2025年までにすべきこと

- 諜報能力の強化
  - 武力による紛争解決を避けるためには、世界の状況を正しく認識し、交渉によって問題を解決する
    - 宇宙からのImint, Sigint、外国事情の専門家を含むHumint
- 交渉能力の強化
  - 分野ごとに10年、20年選手となる専門的な行政官や政治家を育てていく
    - 語学能力、分野ごとの専門知識、それを支援する専門家集団
- 国家の魅力の向上
  - 技術力を産業、社会、生活に活かし、独創的なモノづくりや情報発信能力を向上する
  - 国内社会に「余裕」を生み出し、クリエイティブな社会づくり
- 断固とした対抗能力の構築
  - 「国益」の定義と、それを守る手段の確立→サイバー攻撃やテロなどへの対抗能力の構築
  - 何らかの被害を受けた際の「復元力（Resilience）」を持つ国家
    - 「想定外」の事象に対しても、次の手を打つ能力